特 12
12

No16995/22

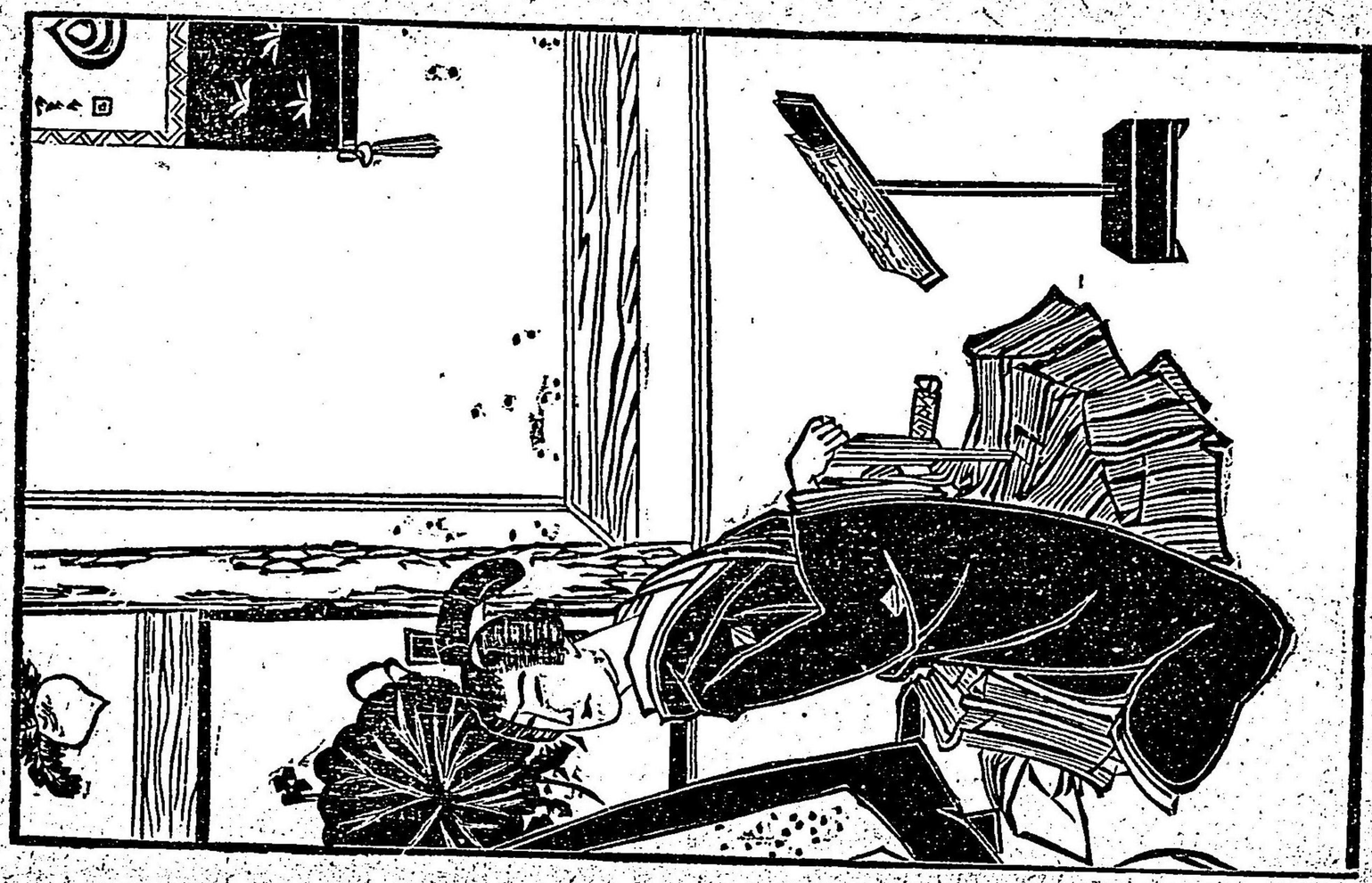
序

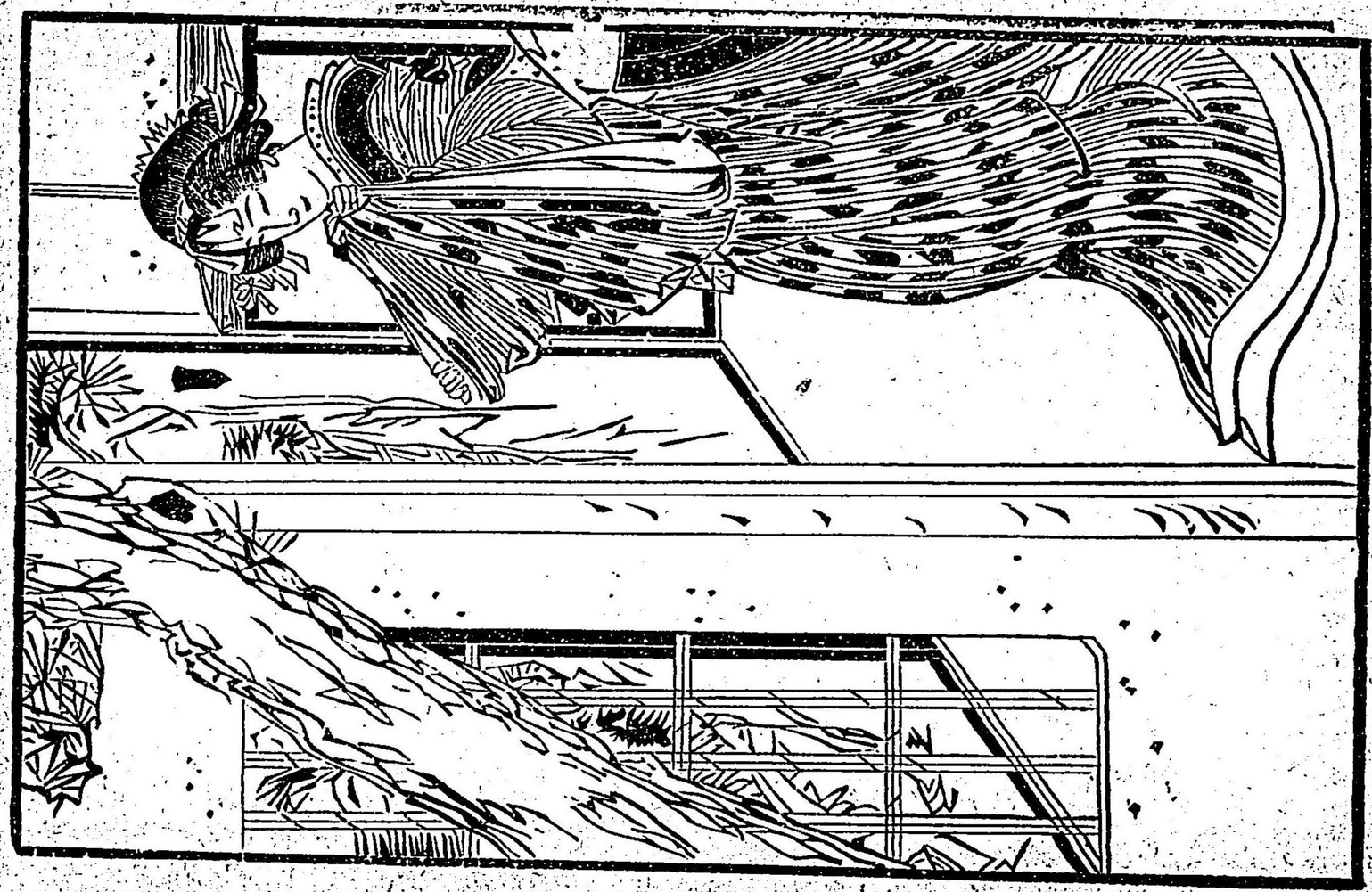
坊間の贈答本は大抵は其實其虚確証する能とす此編の如き實録中の尤實なる者にして信を措き足る者を取り網羅蒐輯せしかり抑阿七をして方今文明の盛世に遭遇せしめ歴制束縛を脱し自由結婚の説を唱へしめ情人の爲に其情を遂げ夫妻共白髪と終に天年を全ふせんに惜ひべし刑法の峻なる火刑に處せらる嗚呼憐れまざるべけんや悲まざるべけんや猶客阿七が痴情を去て編者と倶に其鑒を吊せよ

明治二十年一月

神民子誌す

二〇九三





●八百屋三代の興廢久兵衛が慾心禍災娘に及ぶの事
●油屋武兵衛へ於七を懇慕して恩をあたへて娶んとする事
●武兵衛金を賄ひてお七を乞ふ久兵衛お七を嫁せんと約す事
●久兵衛賄ひを得て武兵衛に約する事
●出火して家内吉祥院へ落行油屋惣兵衛途中狼藉の事
●お七吉祥院吉三郎へ懇慕悪僧辨長文をひろひ武兵衛へ内通の事
●安井家の士利倉十内吉祥院へ至る武兵衛狼藉十内を撃る〻事
●利倉十内吉三郎へ誅言を加へ母とお杉お七へ異見の事
●久兵衛お七を油屋へ嫁せんとするお七火を付めしとらる〻事
●日蝕上人お七が助命願ひ上人胡蝶の夢にて悟道を得事

以上

八百屋於七胡蝶夢全

◎八百屋三代の興廢久兵衛が慾心災禍娘に及ぶの事

父は糟糠を喰ひ子は精饌を飽孫と遺穂を拾とて商人三代興廢の迹をいへり這里は江戸本郷のあたりは八百屋久兵衛といふ者あり起て葛西の土百姓ありしが本分老實漢にて耗糧より
する寶物の蕪青大根を脊に荷ひ八百八町に賣り弘め後にて擔負を店に移し場所よきところ
と借店を藉り手一築は採揃へ在所の村へは借し入仕込し四季の初產開端は紫蘇椒芽野蜀葵
雞腸菜は土筆菜蕗菜蕈から蕨首に滯公英春の一首の賣出より夏は茄子に諸瓜竹子秋松茸に
芋茨菰小野篁歌つくし那に一箇だに無きものなく店は飾りし七重八重次第に儲けし金銀は
借屋を買ひもとめ八百八町を賣家とし積重たる八百八品足し八百屋と道ざらんや家主
は這年六十五才嘸日の能き人なれども三年而方中風の病手足は癱瘓て便もぬ調保にて甚底
の不足もなく任せぬものは人の命遂に其年秋の野邊北邙の煙とこそは成ぬけり跡に繼く子
は久右衛門とて這年盛りの三十八才親は似ぬ子の鬼ならで生れの儘なる嬌裝筑紫落の踊弛
どのよて有無のとは裡外厠は任せ花に狂ひ酒を縱まゝにし柳巷花街を大路とし西は遊び東
に走り遂は荒淫亂酒の爲に篤き病は掛りて既は死は垂々とせり久右衛門重き枕を搖け我女
房はむかいていひけるは人死するとき眞性はかへるとかや我れ慮らずも朔行孟浪の周旋
を做し生理を鹵莽にし營生を顧みず老父艱難漸摩して儲たる蓄積を土の如く水のとくに耗
費し家を滅し身を失ひ黄泉は至りもし參々に逢ふとあらば何の申理はあらんや今我が病悔
死しても目を閉ざるもの是あり我が死もはや今日は迫れり我れ多情にして生せる子もなし
又家督の養子せんも家業が異なれば因便旋設に至るまで四三年も歷ぬへし其間には資財轉

々減損じて破落すべしよし又雇子とても指頭する方もなければ墓望は家姐甚麼兵介と再嫁ありて此家を繼興し呉よと兵介も召來せ涙に咽て托けるにぞ二人も拳局剪盛辞するといへども呼意あや立刻死に近し疾々と盃盞を出させ否容分説よ婚酌させ歡適容して睡るがとくに死し逝けり話説這の兵介は河内の者にて十四よして江戸へ出八百屋久兵衛方へ小厠わ來り生質幹者にて手迹も能し習はすして算勘よ悲く搬運拮据よく一つとして要捷者ありしかば只顧愛撫して他に渡さず既に十四五年も隨從し當家よも管家わも只一人の精勤もる親久兵衛の當年と相應の妻をも呼び久右衛門の後迹ともおさばやと思ひし間に病氣に罹りしを久右衛門も能く知りて此場の諛りもなせしと見へたり妻面夫を重ぬるの恥あれども死期に夫の宥して家の爲なればとて自ら盃盞まで酬はしたるとあれば今更よ辞固かたく遂に是より夫婦とあり先久右衛門の遺言あれば是より久兵衛と名前を改め夫婦伉儷手足更錯拮据して素の資分に復起さんと辛勤節儉を要として日夜休するの日もなく萬事中よく暮らせしよ其年の暮めでたふ一人の女子を產めり是おん八百屋お七とて後の世までの物かたり因果の種ぞ是非もおしされば最に限りあり寸も長き所あり尺も短き所あり兵介が久兵衛に仕るときは必らず寸に長けれども久兵衛と成て家を繼く時は尺もまた短き所有けるにや元來兵介久兵衛と生質才幹の有て健捷おる者おれども天性吝嗇よして富貴に諂ふの情ふかく内の生過と牛の毛をむしりて虱をとり蚤の頭を割て二ッ用ふが如くおれば日々よ寛思おる儲なく彼よ利を得れば是に損し何となく商賣も狹隘なりて資家も早晩となく減し心と日々に狽狽なり下れども利を貪るとは峻奈ければ蜂の巣る軒を避るが如く誰れ買よ來る人もおく月日の過ると矢よりも速く右左する中にはや十五年に及べり有聚裏貪郎の一德にや食ふにと切

不足はなけれども風雨の禦ぎを忍びがたく那里這里と回護へども我よりしたる落縮ゆゑに外の人の賑ふくれる者もなく誠に窘迫屈滯してまた如何ともすべからず今もし這家を賣り商資を止ては先々久兵衛殿への恩儀立ず又久右衛門殿は吾妻を我に娶らして家を譲られたるの義理立ず先向當に分説おきは女房の面下伉儷既に十五年の間尾蜂ある魚をも與へず嚊がましき一衣も着せず甚底の面目有て破落戸のことを告んやまた町中にも我れ此家へ奚奴に來り今若箇の東道と成りしも器量あるゆゑと稱せられしに汚面と見世店を破却して人に笑はれんと體面の醜きと死に勝る恥辱あり我また死せんことは易けれども妻や娘の難儀を見捨て黄泉に至りてもし久兵衛殿や久右衛門殿に逢なば何を以て分説せんやと只顧心猶豫してさらに決せず夫智足らざれば僞り財足らざれば盗みすといへり惚じて人の心と貧すれば必らずしも孔る悲しひかな久兵衛娘を花街に售んとにとあらねども萬望富家に緣を求めて我が薄助はもすべし可憐風流の狂客もかな赤情を以て挑しめんものと久兵衛が蓬心の起れるを悲い哉阿七が災ひを得るの其本なり

予十歳ばかりの頃なりしに古郷に篤芳尼といへる僧婆の有しが其齢九十四にして幼女の頃より故ありて江戸に育長し八百屋於七が行狀を話説されしを小耳に聞く其尼のいへりけるを我は其日と旋室官事ありて見物に行ざりしが同中婢使の話説をきけば於七其日に縛れさまは年齢は十六とはいへど十四五と見もる花娘子なり島那内の振袖を着て背手に馬上に縛られたる風情さすが八百屋の娘なれと吉原深川の風流の治妖もなく又銀杏のお藤笠森おせんといへるほども風言はなけれども柳腰と窈窕にしてさながら牡丹花の雨に悼めるが如く居る人行人口々にいまだ案慮おき小娘子外に御沙汰はあ

きものかと袖を濡らさぬ人もなく森ゐ聚る人々も驚破火を懸ると見るよりも皆一同に目を塞き南無阿彌陀佛南無妙法蓮華經數千人の同向の聲谷響の森に響く音淺ましかりしとありと語れり心ある人は久兵衛を嫉み己が客嗇强慾より一人娘を火にあぶる親ゐも鬼は有けりと嫉まぬものとなかりしと聞けり後また尼が壯盛の時に吉三坊主とて江戸口々に濡佛を立てお七が罪業消滅の爲とて勸化して巡りし坊主あり這坊主と知りて居れりと予が十歳ばかりの時に聞置たるまゝ爰に奇説を擧て後人にしらしむ

◉油屋武兵衛於七ゐ騙慕して恩を與へて娶らんとする事

富て奢ゝぬはなく貧にして謂はぬはあし貧うして謂ふの狡賢と人を欺し賺して利を貪らんとの志に有りこの故に八百屋久兵衛は己れが客嗇のもゑに讓りの家道も早晩とおく手窘今とはや若箇ともすべからず先主人の義理といひ女房の面下世上の面體一時ゐ身に逼り右に支へ左に支へせんすべなければ本性貪惡の志を内に巧み娘於七を後家の妾にもやらばや又は世間と嫁入の分ゐして遠く人しらぬ京大坂へも鬻ばやと邪巧はしてあれども卒忽に女房にも談じがたく又本性に顧みれば願としきとにもあらざれば少しは身に耻て縮み無念の牙を噛とあれども遺憾なきことに思へり這里ゐ上三丁目に油屋武兵衛とて家魁の油問屋あり親父と去年の春死去せられ内母一人にて兄弟とてもおく管家七八人も遣ひ家裡二十人餘も追廻し日々繁昌の家なり富は敬とる、あらひよて上下三丁目の間いづれ東道〳〵と稱せり這東道當年二十四にして先東道去年存生の時縁組のと彼是と相談もありしかども逢ふと餘け逐ぬは就らず遂に内に先東道は死去せられて于今無妻よして妾一人を置て當分の渴をうやせり子に嬌は母のあらば婦や金銀は自由なり一日も速く嫁を呼むかへたく諸々方〻と問

繕ひ既よ就りて見合になれば斷られ毋も焦心て此うゑは家族にも寄らず貧福にもよらず武兵衛が氣に感じたるものあらば呼び迎ふべし調度支度と這方から爲べし手代其までも努力して穿鑿し求べしと母御より仰出されしかば是僥倖と醜箱代の惣兵衛といふ者武兵衛に隨從して西ゐ走り東に走りて俟ひ賄賂貪らんとを巧めり武兵衛もまた白小賊の盜する如く娘子の有家〳〵を垣見してぞ廻れり然るに四丁目の八百屋の娘を聞出し一望見まほしく一日其戸前を彷徨して躊躇せり久兵衛と三丁の東道のとあれば見店の内より竦跪挨拶すれば含笑して會釋し通れり翌の日またもや來りて踟躕しかば久兵衛趨り向へ些御凭下さるべしと塵を拂へば愕然として店頭に倚り上野御寺方へ獻上の椎茸五十斤ばかり買得たし佳品の蓄へあらば見せ給へ不遺買取べし久兵衛跪まり頗る蓄へあり御覽ゐ備ふべし熟閲店中あれども醜醍をいとゝず先御上り下さるべし娘子哩於七哩御茶持來といひつゝ土藏へ椎茸を取出しよ入れり頃てお七は茶を携へ湯茶一ッ進上せんと捧出す茶碗を取る内も顏見らるゝの恥かしさに茶盞さし置き其儘に翻々として内に入たり一飲の茶と咽を潤すと甘露の如く覺へ今一ッ乞ひ求んものとおもふ處へ久兵衛と椎茸携へ御待遠ならんとを謝し椎茸のしなゞ〳〵さし並べ彼是とすゝむれども恍々惚々として心這に椎茸にあらずいづれ椎茸と善にも惡にも皆買求べし椎茸のみにあらず山も川も買求むべし以後這方の宅へも出入致さるべし又諸用事もあらば竊にいひ聞されよ三十五十等の金子の儀と表面手代共に斟酌に及ばず何時にも申越れよなどいと懇切なる賴爲よ涙をあがし有難がり白眞は私しも近年と多風雨にてサ「ゝ左樣に聞たり當日全家とそくばく箇人ぞ儘ゐ妻と娘と下婢一人のみ休怪な造化は車の輪の如く運が來れば左樣なるものにあらず誰が一人負荷して鼎力よあるものあらず切は勞することあらじ命愛は春齒幾年ぞ日く未だ二八に及ばず斷要なしにて朝暮母の矯餐に長せり否々嬋献たる一個の好娘子あり愛すべし愛すべしむかしより娘子の美麗に賴りて父母また富貴を得ること證すくなからず頓て良婿殿を得て御夫婦も逢暮すへの樂みをも做すべしなど云て踊れり久兵衛と茫然として何の由緣をしらず熟々三思するよ這則ち儂娘子を戀慕するの結搆あらん此上もなき造化もはや金坑を得たり何にも爲よ娘を純けんものと深く妻よも隱し獨笑して後の禍いを招けり

●油屋武兵衛金を賄ふて於七を乞ふ久兵衛於七を嫁せんと約する事

人の相に善惡の九相ありて爭奇と爲べからざるものと稟得たる所の生質あればまたいかんともすべからずたとへ惡相の相ありとも常よ愼んて教を守り人と交りて能く和し能く戰らば人誰か惡んや常よわれを縱放にする時と生質の惡相しきりに現れて爲る所就す所内外に出て人よ忌み避らるゝに至るしかれども自已は其邪まあることをしらず何んとなれば我より出て外ゐ制するものあき故あり土豪富有の人の家の子に有ものなり油屋武兵衛と原より富有に生れ飽食煙衣に育ちたる者あれば人表も能く脊高く膚白にして面躰も具足し常に上田八丈結城紬といふ處よして男自負の多有惣よして諤然として褒を張り謔をつき酒を縱まゝよし色に亂れ青樓花街を徘徊して粹を辯じ通を論じ妓婦を請り花毋を煩らせ青鳥を弄り拳酒よ喧嘩をし出し那一箇として愛すべき所なく此故に春城遊廓よ至れども人に忌るゝと仇讐の如ししかれども金銜惡馬を註め金鏑よく堅を射る奈せん財用の盡ざる醜しといへども又爭奈とも爲べからず酒家青樓の服する處あり此故ゐ益々威色を振ひ六國と猶我が麾下

にわりと贅し人の色を碍げ口舌を唆け人を謗り人を嘲り縱脫に遊里を橫行せり後ゑは武兵衛が至る所の靑樓へは人皆行とを止めたりしかば靑樓も又門を閉て癲人を忌か如くせり鐘を室中ゑ擊ば其音四方に響く誰いふとなく油屋武兵衛は刀狡不行の者ありと人避て交るものなく況や緣を結び婿をもとむるものあらんや此もゑに八百屋の娘に婚を求んと計較たるものなり油屋武兵衛と兩三日と八百屋へも來らざりしが此日遊興の歸りとて手代惚兵衛と共ゑ店頭ゑ來り暫らく腰かけ茶を乞ひ烟草兩三管を吹き恍惚と娘の風姿を眺て左右すれども久兵衛も出されは不興して去らんとすれば女房會釋して今日と折あしく久兵衛は他行あれば再度御出もかなと立送り歸しけり武兵衛と別に側町の行ゑ入り酒を出させ一兩盞を歷して惚兵衛汝見ずや娘子の風姿木綿の兩翼と雖ども翩々鳧々として細腰また柳の如し艶顏鮮妍として榻蛾咲を含む誠に今時の風流千金買ゑり我是を得んとするゑ橋ゑし汝我爲に求め得たらば白銀百兩を與べし萬望汝が奇才をもつて我に娶したんやいあや惚兵衛盃盞を傍にさし置き且笑つていふ東道何ぞ其ようゑ憶し給へるやかの娘をして妾に做んとさへ別ゑ難きとゑすとゑし蚓んやかゝる豪富の奥室に迎へ給へんと那厠が僥倖怎麼是に過たるとあらんや只今惚兵衛を這里へ招き寄直ゑもらひ獲て東道ゑ獻じ奉つるべしと言語巧に言こしらへけるにぞ武兵衛は久兵衛が言の速かゑるを悅んで竟に私宅へ立歸りける久兵衛他出の去來がけ油屋の手代惚兵衛ゑ行逢けるにぞ折よしと惚兵衛久兵衛を引て直樣行所へ至りまづ酒肴をもて久兵衛に薦め扨惚兵衛いひけるゑ先日より此方の東道慈父の所へ參られ剛染ゑもなられしよし夫に付乍歷とにや此方の東道娘御お七どのを分外氣ゑ入萬望もらひ請度との思召し入知得了ごとく此方の東道今ゑさだまる內室もなし是迄も先老郎去年急あ

る御病死にてかく遲々せり勿論どのようなる豪家又ゑ武家方のお娘御那這より發子分ゑし、てもらい受ると諸方よりも申納れあれ共母御も武兵衛樣も分外器量好みひてふの貧なは却つて心易くして萬事ゑよしとのゑ慮外ゑがらかよふ申せば些失禮ながら慈父の爲にはまつ福德の三年めとやら申もの疾歸られて御內室ゑも悅ばしめ給へお七どのも春花の娘子男はよし有財幾刻を極て早く應報せられよと偃蹇擅て言けるゑど久兵衛も心惡き分說とゑおもへども胸裏計較事なれば今さら止了べきにもあらで轉々の御請助尙御眷顧のほどよろしく願ひ參らするゑりとひたすら諂諛ひ速蚤と八分ゑは慶たりと大ゑ悅び足をゑやめて我宅へ立歸りけるにぞ家內のもの何やらん逆興氣ゑ打舉てゑおし居けるに久兵衛最も善首尾なりと猶も樣子を覗ひ居たりしに婢女の杉打笑ひていふそもや世には邪忌な男も儘有が中にも那の油屋武兵衛とやらいふ人色も白し男もよしどこにかふとの難もおけれど肺臟からいやな驕設容頃日から三四度も來おつてお七樣を穴のあくほど邪忌目つきをして眺めて居ましたが若油屋の嫁御ゑても貰ふといふてさんじたらお七樣ゑなたどふゑさるへと尋けるに久兵衛ゑ這ぞ大事と猶も耳を澄して立聞居けるがゑ七のいふたとへ千貫萬貫の豪富でも氣の普ぬ所へ配とゑ忌又何程貧ゑくらしてもたがひにてゝろ瀨よう夫の心の信やかなるてそ願はしからずやとりわけ那の油屋の武兵衛醜面覩ることさへ邪忌しいと立聞く久兵衛胸算さつぱり齟齬ど猶も心をとり直し娘かく武兵衛をして忌嫌へども、し先祖の業蹟立がたき時と其身を苦界に沈めんも時の薄命ならば是非もなきとならずやそれさへゑるゑ今油屋の御閨嫁樣と呼れんと何の不足か是ゑらんや嗜不嗜といふは必竟自己が縱恣主人のため親の爲嫌し誑して遣んものゑ只管氣を苛ち胸の火を消す水もなく火に火をそへて一人娘のお七を

は了に罪人と做さしぞ因果といふもおろかなり

●久兵衛賄金を得て武兵衛に約する事

富て奢らぬとおく貧しくして詔はぬもなし久兵衛と萬望娘を油屋へ配し素の資給にして白主人二個の義理をたてたしと區々心を費しけるといへども夜來の光景にても中々得心を做まじ右やせん左やとおもひ煩ひける中油屋の手代惚兵衛入來りけるゆゑ家内の聞んとを怕れまづ二階へ誘ひ茶烟草を薦め久兵衛只顧身を屈して惚兵衛に詔ひ居けるが惚兵衛懐中より隋金三十斤をとり出し近日結納も參らすべけれどもまづ夫迄の雑費の費用も有べければ我等が寸志にて東道より送られ侍る所あり若不足の義もあらば復々申越るべしと昂然としてさも無禮に申述れば久兵衛は金と見るより雀躍身を轉じておし戴き未だ婚配も半あらざるよ數十片金玉謝するに言葉おししかし妻儀折惡く不快よて打臥し居候へば近日得與申さかせ渠等よも悦ばせ申べし否の義は萬事よろしく御回護憑入る所ありと言巧へけるにそ惚兵衛も安堵のていにて此上疎畧の義は有まじけれども一日も速く回詞せられよと言葉のこして皈りける此樣子を妻とお七いかさまにも且訝しく障子陰より立聞して妻と娘も大ひにおどろき扨こそ一人の女子を牲へにして金を得んとは夫ながらも畜獣の心やと泣入お七を省めすかし必らず氣づかふとにあらず迚もあの通り卅兩の金までとるくらいのと今さら忌といふたりとてよもや遣ずにはおくまじければ今宵窃よ道の家を立退葛西には先久右衛門どの、所縁もあればそれを憑みて此難を脱れ油屋へは行ぬよふよ母がよく〳〵策るべければ必らず深く歎くべからずと家常の物など治行し徐々逃出んとなしけるに主人久兵衛其形振をはや知りたるにや夫とはあしよ杉を呼彌介を呼び今宵と何とやら心澄がたき夜なり南

斗低ぬうち門戸も裏面も閉て寐よ儻門へ出る者あらば我に告しらせよおど妻女子にきけかしゐ喚り〳〵其身も脚て臥寓よ入けり夫火盛んあれば水を燥し水盛んあれば又よく火を消す水火半刻もおくてとあらざる物あれ共尤るとき災ひを生ず既にその夜も丑蘭頃母と娘は宵よりの憂悲みよ夜も寐られず耿々として睡眠中庇の軒に火もへ出で折しも夜風の烈しくしてばっと燃たつ程こそあれそりや火事よと噪ぎたち母と娘の手を引て倒々轉々逃出る久兵衛と一心不亂金を切と腹にまさしめ大音にて妻子を呼たて疾走よ疾出よと喚り〳〵其身は直よ佛間よ飛入祖師樣を引抱へ帳面を手よ提て表の方へ逃出る杉一人は甲斐〳〵敷内義とお七を先へにがし我身は跡に殘りて箪笥をあけ小袖七八ッ裏袱おから脊よ負母子を慕ふて駈出る彌介は強力手よ當るを幸いにむせうよ働き蹈廻る早四方よ火廻り八九軒の延燒なれども皆々手強救火也へ早速に鎮りはしたれども久兵衛と只塵灰もなき丸燒殊更火許のことあれば町内宿老の結正よて一先菩提所へ落行追ての御沙汰を待給へと内意よよつて久兵衛と吉祥院へ急ぎけり此時油屋武兵衛は久兵衛が丸燒よなり親子零々に迷ひ出たりと聞き窃に惚兵衛よ耳語きはやく尋ね探して引とらへ那里の粗房へありとも情をかけて入置べし我跡より至りて母にと金を與へ幸ひあ女を諄落し我多年の念ひをとらすべし此擧止よて是定て嫁入もはてし有まじもし母親他の亘碍等あらば威して成共とかるべし然而后久兵衛夫婦のものへおもふまゝに普請をして安慰お仕込つかわしあば渠等が十分あらずや必ず失落な做果下よと自己外袍手早く脱て與れば惚兵衛大にいきり出し斯有がたしと尻ひつ捲げ既がごとくに走りゆき那里還里尋探しけるに漸々と見當り夫と見るより惚兵衛小腰を屈め會釋して扨々今宵は存じ懇おき急變さぞかし畏難察し入處なり就てと斯御家内打連れ何所

へか御こし候ぞや主人武兵衛申屬候は幸ひ此方邊より潔素なる粗房もあれば御誘引申べしと云付たればまづ〳〵此邊へ御入下さるべしと俄然惣痴呆丁寧母と會釋し御しんもじの御情有がたくぞんじますれど久兵衛も不慮の變にて今晩菩提寺吉祥院へ落るまゝ私しどもは直樣お寺へ參りませねば家内もあんじまするゆへ武兵衛樣へよろしく御禮御申下さるべしと云けるにぞ左樣あらば御内儀は右も左もお七どのゝ此頃久兵衛どのへ附妻より申受置たれば是非此方へ御遷與し有べしと已より狼藉にも及ぶべき躰なれば事むづかしと娘と共より逃出せばそふはさせじと擁止るを彌介は大に怒りをわらわし惣兵衛が首頸掴て擲のくれば惣兵衛こゝぞと威しの腦ざし彌介は無手よてあしらいかね其間より母〻辻番所へ馳入り御覽のごとく女斗りの途中にて狼藉ものゝお出合難儀いたし候われ御扱下されかしといひけるにぞゝりや打殺せと一勢より長棒引提追取卷ば斯は惣じと惣兵衛は逃足だして逃走けり

◎出火して家内吉祥院へ落行油屋惣兵衛途中狼藉の事

財は善人を活し又善人を害す人皆財の人を活すことを知つて人を害することをしらず老子に曰く慾多ければ身を滅し財多ければ明を蔽ふと久兵衛今曉菩提寺吉祥院へ落來り上人へ委細を憑しより旦速成允しとり敢ず先酒飯を進め一寐入して氣を鎮べしと別房へ臥しめけるに未だ妻子の行衛も知れざれば心と離々に惱煩怎麽これ迄も造化低の屬來るかあと悲嘆のなみだ更に不止丁今はは早只燒益丁脱得赤條々に成たれば旦暮の薪烟も立がたしといよ〳〵惣兵衛より請取し此三十両の金を資とせざれば今さら詮すべあし何分妻に商議すべしと益々慾念いやまし其日も卯の時頃より至り妻娘お杉彌介諸共に漸々御寺に尋ね來りしより久兵衛悅び頓て上人も出迎ひ給ひ今曉の變火途中恙なく來りしと悅ぶと限なし妻子は吻と吐息つき

今朝徨漂迷來る路條より油屋惣兵衛追來り其邊の粗房へ住置べしと武兵衛より申屬たればゆる〳〵御入り下さるべしなどいろ〳〵言まわしけれども何とやら氣味わるく斷りいふて遁れ去らんとなしけるに惣兵衛致圍して左あらば娘御一人は留置るべしとお七を引立ゆかんとせしを彌介執て擲除ければ惣兵衛大お怒りを現し其儘脇ざしを拔て切て懸りしが彌介ど無手なり是非なく殿方の御廊かはしらね共女子計の途中の難儀御慈悲より御救ひ下されたしと憑けるに辻番の侍心得たりと長棍をもつて捕圍けるにぞ惣わしとやおもひけん逃足出して遁失けり今曉の火事といひ惣兵衛が狼藉と申信に心も憶ならず偖〳〵主が主なれば家來までの悪黨もの辛ふして此御寺迄脱れ來りしありと涙と共に物がたるにぞ又もや思案組鮫默してしばしは言葉もなくかゝる所へ油屋武兵衛いと爽かに出立一僕お提盒の袱を取もたせ玄關より入來れば倉略こそ又油屋と母と娘は一間へ遁入隱れけるおそ武兵衛は從容として入來りまづ上人へ會釋し且久兵衛に打向ひていふ夜來と不慮の變難御所宅も殘らず燒失嘸かし御當惑察し入處ありしかしまづ〳〵別お御切撲もこれあき樣子大悅至極せり上人樣あも大勢の御厄介猶此上よろしく憑存ずるあどとやお七が辭めいたる挨拶にて疎意あき体よ會釋けるにぞ久兵衛も敬〻しく禮を返し御想情にもさつそくの御諷詰問はどか添けあしと只顧詔ねり而謂けるにぞ武兵衛かさねて今朝眉に火の付たる如く變火より御内資娘御あど御周章の上定て御空腹にぞ候べし暫時の間御休息もあさるゝ樣にと存じ手代惣兵衛に申屬しに那圓原來の痴呆ものゝ也お御内室御娘子あど驚かせ申せしよし偖〳〵失禮よろしく御詫玉るべし莫說此般の燒失御心勞とて申あがら何の少し許りのと御家業と高のしれたる青菌燒盡に成たるとて高が大根蕪又家土藏迄も三四貫目の估價少しも御心勞より及ばず則ち昔譚

料二百金御合力申候御請取下さるべし此末とも御夫婦は安樂ゑ暮させ申べし偖此提盒は御見舞のしるし迄に參らするなりまた〳〵一兩日中ゑ御尋申べしと立歸れば久兵衛はひたすら武兵衛ゑ面謝ひ跪になりて見送りさも嬉し氣に見けり夫失火して雨を喜ぶとは愚人のたとへ此久兵衛がとなるべし上人懇々と久兵衛かゝ悅ぶ躰を見て嗚呼狠賤の心なるやと打覩じて居られしが上人夫婦のものゑ宣ひけるはむかし唐の那某といへる人あり二人ともに眞卒朴直の人にて園畦作りて渡世とせしゑ或時畦の中より一つの瓶を得たり開きて見れば光〻たる黃金ありしゑ妻と大ゑ悅んで是天の賜のなりと取んとせしゑ夫のいとく天よく物を生ずといへども播種ぬものを生せず今我力作せず種播ずして空く金を得るは不詳なり今我が二人の的力作して喰へば餓ることもなく寒もるともなく日として足らざるとゑし箇程の寶有ながら那ぞ不祥の金を得んやとて本の所へ埋たりと聞隣なる人是をとらんとさま〳〵尋ね搜せども一物もなしと其後かの夫婦の人次第に稔を得て富貴ゑかりしとゑり今足下も又由緣ゑき人の財を得て家を復起せんとするゑ畦の金を得る人の加し我又熟〻武兵衛が樣子を見るに太だ凶惡の相あり必らず禍害出來るべし甚底由緣もなき人に金銀許多を與ふるは究て深き望の有ゆへ成べし若其望み叶ひゑば幸いなるべし叶わざる時ゑ其金を得たるほどの禍害免れず了にゑ繩目の愧めを蒙り其時千悔爲といへども及ぶまし聞と承まされば御七を武兵衛へ送らんとめさるゝよし若娘氣に武兵衛を忌嫌ふ狡刷たる心より奈何成謀謀を仕出さんもとかりがたし其時彼刀等狡が豈二百兩の金を棄んや赤裸にしても取らずには止まじ能〻思惟し給へかしと曲折戒め玉ひけるゑ女房も涙を流しいと難有き上人の御戒敎かなと悅ぶと限ゑし久兵衛も今更會得の樣に見ゆれども何分油屋が二百三十兩ゑ卷繦萬望閨女

御七を誑し賺し淳落して武兵衛に送らんものと卵業も報も忘れはて面を僻てひたすら耳を閉して聞居たり

㊋お七吉祥院吉三郎に戀慕惡僧辨長文をひらい武兵衛へ內通の事

却說久兵衛と本鄕の譜請に取付晝夜となく急ぎけるほどに過半修理も出來悅ぶと限ゑし茲ゑ當院內に吉三郎といゝて漢の彌子瑕和朝の業平と帥儆美少年有り江州安井源次兵衛といへる人の二男ゑりしが此源次兵衛日蓮經宗信仰ものにして二人の子あり兄を家督とし弟を出家さすべしとの願ゑりしか共家室並ゑ諸親類も打集多生なせる許り子にもあらずはしを れ鏡の同胞的此件ハッ延引然るべしと諫れども曾て聞了なし俗諺にも一子沙門に入れば九族天に生ず如箇の大功德ゑ甚底不足かあらんと竟に江戶駒込吉詳院日峯上人へ憑み出家すべしと登らせ置たりされば上人も吉三が怜悧ゑめで玉ひて只管敎戒玉ひしによく師の道を守り適れ後〻は善出家ゑもならんものと末賴もしくぞおぼされたりされば八百屋久兵衛家內は不圖も次變に出ゑひ吉祥院ゑ身をよせ譜請成就までは暫くらし居けるがいつしか久兵衛家內のもの此吉三郎と親しみ分說閨娘お七は吉三が優ゑ窈ゑる風姿に憶浮萍ゑりにふれて之言葉を戲めて挑むといへども吉三郎と素來出家の望もあれば女に心援すべうもなくされば春風誘ふて楊柳動くの諺言岩木ならぬ身のゑゞ惡からめ或時吉三獨り書院に茶を挽居たりけるにたいさへ御寺は物さびしきゑ寂〻として眠を催し居たりけるがお七此光景を見るゑ蓋世ゑと珍らしき人も有つるものかゑ紅粉をからずして自然の國色ありと不思ゑ吉三が艷を打眺め恍惚として有けるが婢女の杉と何心ゑく來かゝり此樣子を見て偖は幸ひ人目もゑし兼てゑお七樣の戀慕ひ玉ふゑ方を媒酌せばやとそとさし足してお七が負を確とうて

ばお七とはつと打驚きこは恐し誰的あるやといふに吉三も目を覺し三人顔を面對して茫爾と暫へば杉とひつしりお七が手を扯き吉三が傍へおしやられおもむず吉三よ行當ればこは杉の甚底をするや吉三樣は妾ごときの醜婦を那や相人にはなし給ふべき深く言かわし給ふお方のおわしぬるとをしらずやかく戯れたるとをかの御方のしろし給はゝさためて額に角し給ふべしなど吉三を吃としり目に睥睨て言詰らへけるにぞ吉三も総て満面を朱めこはけしからぬ言を宣ふものかな嬌婦こそ油屋の何某と深く言かわし給ふわ非ずや儂等ときの桑門よ何の言かわせし婦人あらんやおどたがいに言葉を挑みけるはどわ杉といと干氣がり花に嵐月よひら雲吉三樣もよいかげん萬づと杉に任せ給へと一間へ二人をおしやり〳〵我身も何とかものの寥しく勝手のかたを覗ひ居けりお七はいとゝ身も揮ひ物言とさへ覺急おく顔もわからむ薄紅梅いとはぢらひて見へければ吉三とお七よ打むかい嬌婦の誠篤怎やわだにとおもひ參らすべきさされど儂も沙門は入ぬる身おりせば若妻りがましきことの有てと師の御坊へ面し破戒の罪を怎麼にせん嬌婦も復頃日の風話には油屋何某の方へ嫁屬給ふときくされば二人ながら新よ罪を犯せるにわらず素來我等ときの土鄙的に禍され給ふおどいとさだめて當座の戯れならんさるにもあれかし認なき人の唇齒又恐るべきにわらずや善くよ察し給へやと打宥めけるにぞお七は言句の應へさへおく落ぬる涙はらへとも〳〵不止了何とかおもひけん忽地軀を跳らして庭の井戸へ飛入らんとなしけるゆへ吉三大いに慌忙おし留め其故を索ねけるに迚も妾が願ひの協はざる時とかくあらんことと兼てのかくご郎の沙情と妾が科にしてさらよ郎の過にあらず只管放ちて死しめ玉へと爭ひけるにぞ吉三も今は鐵石の念もくだけお七が心の切なると甚低や儂耳岩木ならん若這の現れなば嬌婦の今死るをば必らず我と一所よ死出の田長となし給へとお七を引寄せ抱きしめ偖こそはかあきゝ名ゐしとおり彼の世までも唄とれぬると是非もなき光景なり茲に當院の髣頃よ辨長といへる醜頭陀わり叢め吉三が男色よ慕悅いろ〳〵口説けるといへども却て恥辱められ望外の光陰を送りける中又もや八百や家内の出來るにお七が色香よ迷ひ臭きものゝ身しらずと或ひは抱付しおだれ屬只管戯れけるわぞ婢女の杉にしたゝか耻しめられ是も叶はず彼も爲らず痴呆の一てつ折を覗ひ居たりしが吉三とお七が樣子を竊かに探り出し寔とにこれぞ究竟のとおりと油屋武兵衛にとり入て吉三とお七があるなし言を告しらせけるにぞ唯さへ邪智ふかき武兵衛主從此樣子を打き、て大いに憤ほり偖と是迚ふ七めに右や左と言延せしも必ずかの吉三めの有ゆへおのれ今わおもひしらせんものと辨長としめし合せ猶もよふすを覗ひ居けるおり

◎安井家の士利倉十内吉祥院へ至る武兵衛狼籍十内に聖る、事

却説吉三郎は久兵衛が閨女お七が戀情棄がたくよしや此身も後ゝと桑門もおしぬる軀あれば墨の衣に容姿をかへなばお七も又その上に慕ひこがるゝと有べからずと思惟し唯假令の戀中なりしが雨の夜雪の旦かよひ〳〵の數つもりて今と殆と言交しぬる言の齒唇つきしなく殊更お七は油屋へ嫁入するとの風説高ければ心よからぬとにおもひ或は僻言或はうらみ又お七は吉三が心を密かよ孤疑古郷の離兒わめでさせ玉ひて妾と疏く欺待玉ふおどたがいに憶ひ餘りて后は閨房の私語ととなりぬかく切おく戀愛おれば甚低とおく衆目の關にうたわれけるにぞ上人風便おきこしめし玉ひより〳〵暗に吉三郎へ敎化做玉ひけるとなり茲に江州高島家の執太夫安井源次兵衛二人の男子兄源次郎は嫡子なれば家督の名跡又弟吉三郎

と二男なれば父源次兵衛の望によつて出家成しめんと駒込吉祥院へ託し遣しけるが怎麼量らん兄源次郎假令の疾に臥けるが頃日了にとかなく成果けるにぞ源次兵衛他家より嗣子を求んと商議なしけるといへども母と深くも這を歎き萬望弟吉三郎をとり戻し家督相續おさしめんと種々歎き悲しみけるにぞ親族も打集りて此義は甚低さま吉三郎を呼戻すにとしかしと茲におゐて源次兵衛終に這議に同じ家の臣利倉十内をして江戸駒込吉祥院へ遣し兄源次郎相果候に付名跡相續致させたくこれよつて遲頃自由がましく候へ共右申上るごとく安井家相續の義に御座候へば甚麼吉三郎御暇の義よろしく御聞濟願ひ參するなり且些少の至りながら別輻の通り進獻仕まつる所也と色々の音物おらびに方金千正をしてさし出しけるにぞ原來無慾原殼の日峯上人まづ一應十内に會釋の言葉了且別輻の品を辭して宣ひけると安井氏の使節事新しき事を仰候ものかな抑父御源次兵衛どの吉三郎をして當院へ憑み越され玉ひしと假令ならぬ佛緣をおぼしめし分られてのとならずやされば吉三郎にかぎりてと他境の弟子のよふにもおもひ侍らはず頃日既に學問も長經釋誦も出精のとおもと遲きに必らず剃髪なさしめんとおもひゐたりし所おれば吉三郎を返し申さんと努々應ひ候まじと言まき玉ひけるにぞ十内猶も身を遜だりて申けるは上人の御立腹重々の御尤と去ながら嫡子源次郎息才にて其うへにも吉三郎をとり戻さんと爲ば御憤はりも有べき成ど如何せん家相續なりかたきよ付御願ひ申上るとあり强て此儀御聞屆け下されたしと賴けるにぞ上人又宣ひけると兄弟餘る時とて出家あさしめたらぬ時とて戻さんとは太だ其意得がたし武家は貴くして佛家は尊からずや何ぶん這義は御歸りありてよろしく申さるべしと宣ひけるにぞ十内もとらをたて此上は是非もおし上人御遲與なくば某し盜出してもつれ歸らんとたがいに鬪爭止ざりしが卒遽に院内躁動しく和尚も十内も自己の鬪爭をやめてまづ勝手へ到り見れば油屋武兵衛手代惣兵衛を引連其外狡徒漢子ともおひ來り武兵衛まづお七が方より吉三へ送りぬる文を懷中よりとり出しその儘吉三郎が髻りを引掴み喚叫罵りていふ若冠狗偷よくも我等が女房お七を姦婦ひろぎ我眼目を掠しよな姦夫の罪は五刑の中最も重し若冠が如き邪曲艶冠髪已來の見せしめなれば應所へつれ行逆梟付よ行とせんと自ら拳を固めて擊と三四十十内這光景を見て跳隔て武兵衛に對していふ其許の立腹はさるとおがら必究其元の淫内政の不埒より起ると雖も遠方より唯今漸く罷りてしたるとなれば深き樣子と委曲存じはねども御内義より吉三郎樣へ送りし文とやらそれと屹としたる證據とも做がたしお内義より吉三郎樣へ送りし文ばかりにては全く之と片便よして二人よりとりかとせし證據なくては罪におとしがたし其上其許おも血で血を洗ふ恥ならずやよく〳〵考慮仕玉へかしとおし留めけるにぞ武兵衛惣兵衛猶々いきり出し惡僧辨長を呼出していふ過刻よりいつくのお侍士かはしらねどもかけもかまわぬ御世話近頃御苦勞なり左ほどせせふてが見たくは此的に淫事候へといふより早く辨長進み出既に口を發かんと爲けるに八百屋の下女杉おしが遲ひに來かゝり此躰を見て折おしければ小陰に立彷徨て有けるが武兵衛が縱恣辨長が邪計耐かねて躍出で十内が前へ手をつかへ婢女と八百屋久兵衛が下女杉と申ものよてござ候が手まへの娘御お七樣はいまだいづかたへも緣附の義と定まり不申最これおる武兵衛樣は度々の御所望のよしなれどもお七樣おと中々武兵衛の所へゆくとと扱おき面貌見ると

さへ邪忌よし死たとへどのよふなよい出世にあるといふても脇へ嫁入は忌とのとおして那武兵衛の所へゆくゑんとふつ〳〵おいとのとおればお七樣は武兵衛の嫁でも女房でも近付

でも何でもござりませぬ夫ゆゑたとへ吉三様と戀愛があるよした處が何にも武兵衛の拵と
ぬと者氣するおら女房にもつてからしたがよいと理の當然を説ければお杉が詞酬へかねた
る武兵衛が我慢醜女聰の切れ過たる鄙賤婢女目にもの見んと詰寄るを透さず十内杉をかて
ひ刀の鍔にて武兵衛が額をはつしと擊ばこと狼藉と惣兵衛辨長左右より打てかゝる心得た
りと早速の速業三人均しく打のめらし刀を引拔さん〳〵に打懲し汝等抑々此吉三郎を怎的
と思しぞ苟くも江州高島家の家老安井源次兵衛が息男汝等ごときの土部夫として無躰の打
擲生命しらずの蝨虫めお七を己が女房おりと偽る耳ならず長そでの寺を見込傍若無人のふ
るまい身覆ゝ似ば首と胴との生別れと鬼神も挫しぐべき勢ひに武兵衛主從は伏たるまゝ身
動きもせず打倒れ居けるが上人座を立玉ひて辨長を引起し汝生得中々出家を做べき者に
あらず今より長く師弟の縁を絶ぬるまゝ勝手次第に還俗して恣まゝに惡事を做よと首筋掴
んで門外へ突出し又武兵衛主從を扶け起し玉ひ其元の惡心より直さずんば後必らず禍害あ
べるし毋回と十内どのゝ詫言して助參らすべし後々をきつと嗜み玉へとこれも同じく門外
へ突出しけるにぞ武兵衛は骨々碎るごとくおれ共我慢のへらず口罵りちらして立歸る

○刹舎十内吉三郎へ誡言を加へ毋とお杉お七へ異見の事

日暮上人と過刻より寺中の躁動世間の聞へを憚り玉ひ只管心配なし居られけるが十内が一
舉の働きとかつ杉が頓智のおす處にて武兵衛主從と逃去りけるといへ共只納らぬものは吉
三郎とお七が身の上上人まづ十内吉三郎の兩人を房裏へ招きて宣ひけるゝ武兵衛が一時の
放蕩ゆよつて不慮もお七吉三郎が譏の現れぬれば是非おく明し語り候とん過去頃八百や久
兵衛失火につき當院へ寄來りしが縁のはしとなり八百や家内逗留の中甚麼そこら方當醜顰

とつい痴な契約も出來たようす愚僧を見込んで頼みこされし源次兵衛どの〳〵手まへ奈與道
理有べきとより〳〵意見も加ふれどお七が退ねばこちらもその氣次第に寡る水の出端アヽ
呆なとや武兵衛金の借財もあらば是非お七は油屋へもかずば成まいそふ成とこちらの方よ
りお七は生てゝゐぬとの樣子邂逅出家の腦に生れ佛經讀誦は做ずしてお七吉三が身の上を
日夜あんじ煩ひて心の安き閑もなし那の渤海よ比翼鳥有行とさは雌雄相ならんで泳ぎ叫ち
人よ獲る、時は必らず共に死を同うす又湖水に鴛鴦といへる鳥あり雄死る時は雌その尸ね
を抱て日を經ずして共に死せるとなり畜類鳥類さへ愛慾深ければかくのごとくあらずや今
朝十内どの、國元より其方を迎に見へし時のその嬉しさ早速手渡し申さんとゝおもひしが
よく〳〵三思を廻らせばひよつと結陽若氣の無分別から世間お有格な心中おどせまいかと
態と心よもあらぬとを闘ひしゝ其方よ誤ちなきよふとの師匠の情お七がとゝふつ〳〵おも
ひきつて國元へ歸つて親の家督相續師匠への孝親への孝君への忠義お七獨さへ棄れば三方
四方は皆納るむくつけな出家形氣と必ず恨んで呉那哩と未來を曉す御身にも師弟の恩義棄
がたく御衣をぞひたしける十内と最前より上人の御教化よ胸もはりさく難有涙吉三郎と何
思ひけん刺添抜て髻りの中をふつ、りおし切文振袖の袖も同じくおし切て下に置今更求鍔
がましくと候得共退ぞ退れぬ義理と義理なれ共上人樣の親より篤き御心配且十内が精心お
七がとを思ひ切し證據と此黒髪と絹の片そで我一生の獲物とも見よかしと必らずお七へ御
渡し下さるべし逢ふては却て日の種いさや這より立歸らんと内にと言ど立かねる上人涙を
はらひ玉ひ懇白〳〵と自ら旅の用意まで御心屬給ひしが十内と唯上人をふし拜み凡慮なら
ぬ師の御恩名殘とてれいつまでか盡しがたしと泣入吉三を種々に諫いさめて立歸るお杉と

けふの騒動と吉三郎の國許より十内がむかひに來りしことども委しく談話且吉三郎よりお七がもとへ送りし文をさし出しけるにぞお七はうれしくとる間もおそしとひらき見て還そも甚低せん上人の段々の深き御情け十内が忠義の心盡し親の爲先祖の爲大恩ある師の御坊の御教化に從ひ今宵中に當地發足するゆへにそなたと隨分息才で油屋へ忍入し双親の心を安め又もや御ゑんもあらばゆる〳〵御目おかゝるべし定めてこれまで申かわせしとの薬も皆もてあだし事とおりぬるとゝくれ〳〵も約束事と御あきらめ下され候との文句今宵を過しなば吉三郎様必らず古郷へ御歸り有らんと疑ひなし怎れに爲とも今一度逢ひ參らせ候てはあ一心總て忍びがたしと唯怪けお狂へるが如く眼逆立喘息して表面の方へ駈出んとなしけるを杉と鶴きおし止了どゝ應はず這光景よ母も共々跳隔て多方賺し宥め母密よ吉祥院へ人を走しめ吉三郎といまだ二三日も逗留のよし此方へ御申しこし下されたし娘お七へかう狂氣のごとく今宵中よお寺へ參るべきの容姿なれは此よしよろしく願參らする也とヤ遣しけるよぞ上人其旨御承允ありて聽て八百屋久兵衛方へ人を遣し右の一件ヤ入れけるがゆへお七是を實なりとおもひ茲におゐて此夜はよふやく吉祥院へゆくと止たりといへども夜もすがら寢もやらず只管もたゑくるしみ居ける母と杉は多方々相談なし處せんおの躰おらは吉三郎どのよわかれては生てと居ぬとの様子まづ〳〵今しばしの所とやはり吉三どのは寺お居るぶんにしてお七を詐しその上上人様とともだんごふおしとつくりと合點のゆくよふに異見をしたらまんざら得心のゆかぬとは有まいと杉と二人が密談して其夜はまづ二人とも打臥しける

久兵衛お七を油屋へ嫁んとするお七火を付けめしとらるゝ事

油屋武兵衛は吉祥院の狠戀に背刻痛よ逢ひ心に怒りて久兵衛が家に横寇お七が應答を絶聞と只願迫蹇督責すると酷虐けれは久兵衛大いに畏縮一言答ふるとをしらず漸くして道言と既に就れり今些しの塵碍ありぬれば明日は屹度返事おし申べし千里の遠きも漸く一里の近きに及べり津に入つて船を覆へさば甲斐なきとならずや兎角性急たると事の防礙明日と娘妻よも申屈采艶應否をヤべしと武兵衛をいろ〳〵透し宥めて飯らしめけれとも今さら施こすべき手斷もおく所詮何も麽も打わかし妻娘に憑み見んものと二人を二階へ勝ひ抑々われは紫河内の産れ十三の時此家へ丁僕奉公に來り朝夕の御恩に預り年歴るに應がつて内外のとゝわれに任せられ後おは久右衛門様の後跡よもと身に餘りし御厚恩夫さへ有るお東道久右衛門とのおもひも寄ぬ御大病瀕死の時の枕下に召れ家業を遺らず涉譏り怖おふや自分の妻を家來の我に娶偶べしと御盃盞まで下されし有がたさ骨身に徹り夫よりして家業を守り一粒一錢も疎にはせず手足拘搭拮据とも秋風落葉に資本も消へ用はずして氷の消るがごとく甚麽して富有の人よ便り雨露の惠も得はやとおもふ所よ油屋武兵衛がお七を嫁に欲しとて若干の黄金を出し尚また幾火の其後も這家普請も仕て恩に恩をかけ今は如何とも做がたし何とぞ先祖への孝親への孝行とおもひ武兵衛が方へ往て呉れねば急卒焦眉の困難となり家を滅し世業をうしおい久兵衛様や久右衛門様を無縁にする是此の母も女房ながらも我が御主人看下雖義を見せては先御二人お義理立す親父の爲よ若界する娘世間よと澤山に有おらひどうぞ得心して油屋へ往て呉と口話邊れと妻と顔擧げ抑貧富は空行雲のごとしたとゑ貧苦よ結べとて親子中睦くらしてこそ這界よ住んだ甲斐もあれ世間の人もたれしらぬ武兵衛が嫁よ配より乃索苦界よ贈は售れ行末邀ぬは見へてあるお七が窮迫た心から若ものと

が有たらと見よ餌食も同じこと箇程邪見の其心でたとへ身上富貴にあつたりとて先立魂の悦とん寝しの心やと霍るはして血の涙止めかねたるとかりなり久兵衛言句の應もなくお七は泣目の涙をはらい父にむかいて申けるは御父母様に歎きを懸け罪ふかき此體成るはと油屋へ嫁ましよふといそ〳〵として母の手をとり二階をおり久兵衛と胸かしらする親子の別れ心ならずも已が床臥へ入りにけり偖夜も更ぬれはお七と嬶と忍び出征悸胸を兩手に抱へ明後日は吉三様故郷へ御帰り明一日に迫る還身懇しの夫やあつかしの郎やと狂氣のごとく身を悶り立たり焦たり頓におもひ附火の思案修羅の巷に懇路闇二階よつみたる文庫の卿紙よ蠟燭の火を差点せば掻と燃たつ餓の煙り其儘禊にもへうつり表の格子へ燒出れば遽叫こそ火事よと表の騒動久兵衛は愕り轉倒表のとよと走出る引違ひて武兵衛は駈入見れば怪敷お七が兒相那厠大膳不敵の女郎犯罪をきつと見屆たと小腕とつて引着れば其手よ嚙着咬傷るを上より下へ衛おとせばお七が落る其へうしに武兵衛も共に其倒其間に救火の大勢が奔入〳〵防鎮にぞ難おく放火は鎮れり行老主保赴廻り久兵衛夫婦娘を召呼大いに叱つて申けるとこ去年より兩度の出火真に恥誤不用心の作行遺以後當町にとさし置がたしと晋り怒れはお七涙おがらに云けるは今宵の出火とまつたく父母のしるとおらず去年の火事にお寺へ落行逗留のその中よ憐愛お方に逢ひ染てうれしとおもふ甲斐もなく近日お國へ御帰りとの事扨てゆかふとおもふにまかせず跡の折にも火事ゆゑにお寺へ落てうれしい御見今度もお寺へ落るが嬉しさもし火を放たら彼のお方よ逢れうかとおもふてしたのが親への御咎め私が付た今度の火外よ科人と御座りませぬ阿鼻焦熱の苦しみも露ちりはとも厭ねとも最一度吉三様へ逢て死たい御顔が見たい錦さまや嬶々様は猶り本の處よ置て御着頭おされて下

ざりませとこの自告に皆一同に悲しみの泪に火をや滅しぬらん苦爾地よ管理の幹官渡邊隼人入來れば行老主保出迎ひ正廳へ通しいつれも跪まり今夜中の出火の様子并に久兵衛娘自から白狀の始終逐一申上れば隼人申けるは東西も辨まへぬ娘ごゝろ扨々悲憐のことなり今一應考覆すべしと即ちお七を呼出し詮議なしけるといへ共初めにかわらぬお七が自告火を附たるは私と謂ふを打消二階の間をとり仕廻ひのせつ蠟燭の火おどよて誤つて出火とあるとは儀有となり定めて左様のとならめと寛宥の分に町役人お七親々はいふに及ばず皆一とふに頭を下げ有難泪にくれける所へ武兵衛忽俄蹇出御役人様にと女とおぼしめして御ひいきの沙汰甚だもつて心得がたしお七が火を放候とと此武兵衛屹度見屆し也と晋りければ隼人と打点背汝くわしくも知りゐたるものかなたるものかなたればお七が火を放ぬ最初より知りつらんに其節は唯見ぬふりをなし事の破れよ及んで人を傷ふ大悪其上官法管理とも憚らず出過たる荒唐的夫れ打居よといふより疾く救火丁的鐵尺をもつてした、かに打懲しけるよぞさしもの武兵衛首を抱へ鼠のごとくよ逃去けり隼人は行老を近く招き今武兵衛が申條もわれば此上と私しにとからいがたし重て宜しく審錄を遂べしされば歸結までは須臾へ入れ置くおりと竟お縄を打縛れば夫婦は歎と伏呼び腸たを斷猿の哀聲しばしといふも空吹風五臓を絞る悲しさも愛も泪もあらくれ武士引立〳〵連歸る

●日峯上人お七が助命願ひ上人胡蝶の夢にて悟道を得給ふ事

吉祥院日峯上人は八百屋お七が助命の爲に日毎に渡邊隼人が宅へ來り種々に願ひを盡せども王法の式に懸り脱るべしとは見へざりしが今日は萬望一許の場所我命にかへても救とんものと普留那の辯よ舌を爛らし一向よ免許のことを乞求るといへども隼人一圓領承おく十八

にむかいていふ夫釋氏に佛法あり政事よと又王法あり今上人のお七を救んと身を粟て乞ひ給ふと人を助くる慈悲善根某しとても何ぞ疎意有らんや殊更前後の差別あさ小娘子見るに不便は某とても上人に替らねども奈何せん其夜武兵衛が讒訴といひ又鎌倉中に巡檢の巡街私に罪をかるし免賄賂を得たりあど、風評ありては我役職の碍げ耳おらず君への不忠如何あせんされば天下の王法は是非もなき事と思し召れよしかし今一應主官へ申込べきともあれは夫を憑みに御待有べし上人の大慈悲善心などや感應なからんやと種々宥めてかへしけり欲レ盡ニ出ニ涼一耶可レ得 三千世界本無窮日峯上人と寥々として寺に歸り權者智識の身のうへも定まる業と是非もあし猶も憑は鬼子母神と燈明ふかくさし照らし經音高く磬打ならし今朝よりの勤行に夜もはや初更に至りし頃恍惚ともなく夢ともなく一雙の蝶花園の巡り藕然として飛交ふ風情往了還了翩々翻々飛上飛下左に靡き右に背き綢縱と縋り別れては戀ひ露を嘗め花を吸ひ翼を撲髮を搖し緝々として且戲れ月遊へりはや黄昏の影くらく雌雄の小蝶と四翼を收め花の下へ肌すりおふて宿りけり上人熟々と打覩了實や果敢ものを風蝶の夢にたとふ只目短き夢の間も妹脊の契りもあればこそ這箇むつましく有ぞかしお七が夢の危ふきも十羅刹女の救ひに托假に胡蝶の容と變じ我に告しめ給ふかや嗚呼有がたの佛緣やと俯し拜み〳〵嬉しさ餘る法の園もしや夢見し蝶々の眼のあたりよ有つるやと障子を開ひて燈火をうつして尋るその中に夢おはあらで二ッの蝶灯火目がけて入んとす此仕爲たり誤れりと衣の袖を打はらひ拂へと迷ふ夏のひし此方はは一つと燈火を吹き消間も呀々悲しや向ふに燃る佛前の灯火の火に飛込で羽を焦めて燒死たり上人手燭を陽と乘定まる業と佛力にも及ばざりしか以何合來生得入無上道速成就佛身南無妙法蓮華經

附録

○八百屋久兵衛が妻

お七が所繋、縊れし日より痞癪胸ゐ衝込と三四度次第に癪疾れお七が罪せられし日より一月ばかりを歴て遂よ亡しく成果けるとなり

○安井吉三郎

安井家を相續し後に非業の死をあせしとき、大に悲み枕よ臥て起ざりしを嫂母の諫にて於七が追善かたのごとく供養し後又菩提の爲とて濡佛を勸請したりと聞り東都入口〳〵ゐ有る濡佛は吉三郎出家して勸請せしとは誤謬なりお七が以前より有佛にして吉三郎がお七を追善の爲に建立せしとは跡おき空言なり

○奴隷彌介

お七が罪業見るゐしのびず直に吉祥院へ馳入出家して日峰上人の弟子となりお七が菩提を弔ひしが後檀林へ入て能化となりしとあり

○下婢お杉

お七が死後に吉三郎を慕ひ種々の形身ならびに主母お七が戒名を乞よ頂ひ遠々江州高島へいたりしに吉三郎はいとゞ憐愛お七が相像と逗留さ後似合の良夫も出來近き頃まで安井家ゐ目出たかりしとあり

○悪僧辨長

寺を追出されしより乞食となり江戸中を彷徨ひ徘徊けるとあり

○油屋手代惣兵衛

相州箱根の下よて駕籠を昇雲脚仲間に立交りて在けるを見たる人ありしあり

○油屋武兵衛

元來濕癬の病有り其うへ吉祥院ゐて十内に蹂れ頃額の創瘡ず其上先頃渡邊隼人が屬手の的に手ひどく撲れたる傷ゐて歩行ありがたく人の勸ゐよりて但馬へ湯治に行たりしに湯毒ゐ中られ一夜煩惱して翌朝其所よて死したりとあり本郷の名跡も今とはや差少ばかりは遺りつれどもそれさへしる人も稀ありとぞ

○八百屋久兵衛

妻子を失ゐふの後叢めて夢の覺たる心地して俄よ桑門とあり家東の庵西東陣に身をよせ漂よひ徘徊けるが終にその終る所をしらずとあり嗚呼吝嗇貪慾の人を害し身を失ゐこと個のごとし初め日峰上人と女房との逆見を此ときよ喩らば地獄畜生餓鬼修羅道豈只且の悲みを遺さんや

明治廿二年四月二十五日印刷竣功
同　年四月二十六日出版

發行者　大阪南區末吉橋通四町目八十九番屋敷　中村芳松

印刷者　大阪東區高麗橋五町目四十五番敷屋　大垣彌太郎

發賣所　大阪心齋橋北詰壹番地　競爭屋

特 12
12

091494-000-2

特12-12

八百屋お七胡蝶夢

競争屋

M22
DBN-2463